

山と僕たちを巡る話

北アルプスの最奥、黒部・雲ノ平での暮らしから垣間見えること。
山の生活には欠かすことのできない「水」についての話。

第5回 「雲ノ平の水」

ひとシーズンに3、4度あるかな
いかのことだ。よく晴れて気温が下
がつた朝、雲ノ平のありとあらゆる
草花にめいっばいの朝露が降り、そ
こに朝日が差して草原全体が光の海
のように白銀に輝くことがある。コ
メスキヤイワノガリヤスなどの普
段は目立たないイネ科の植物もこの
ときばかりは、弧線を描いた姿形に
添って無数の水滴を連ならせ、まば
ゆいガラスのオーナメントのように
美しい。思えばそれらすべての水滴
がある種のレンズになって、それぞ
れにひとつずつの太陽が写り込んで
いるわけだから、目がくらむのも無
理はないというものだ。ともあれ、
そのような朝に散歩するのは格別
である。

*
今回は雲ノ平にまつわる水の話をし
ようと思う。

訪れる人によく驚かれるのだが、
雲ノ平山荘の生活は決して潤沢な水
資源に支えられているわけではない。
山荘の生活用水はすべて雨水で賄わ
れており、宿泊客が自由に使える水
は、水量を絞って糸のように細く出
る洗面台の蛇口のみで、スタッフの
入浴も雨の降り方次第では大分間が
空いてしまうことがある。多くの入
浴は雲ノ平を、なみなみと水を湛える
池塘や草原に咲く花々、沢筋から緩

やかに伸びる山麓の緑、あるいは新
しい山荘のイメージなどから、なん
となく水気にはこと欠かない土地だ
と思いついて見ようと思いついて見
るが、現実はなかなかシビアだ。
雲ノ平は山荘付近の標高が260
0mほどで、森林限界に差し掛かる
立地である上に、高い山が隣接して
いないために湧き水も乏しく、雪解
け水を利用できるのも、残雪が多い
年でせいぜい7月いっぱいである。
最寄りの湧き水といえは、祖父岳の
直下で山荘から1・2kmほど離れ
かつ若干標高の低いキャンプ場にあ
るものが唯一利用可能なものではあ
るが、これもたとえば昨年(2018
年)のように残雪が少なく、1カ月
間も日照りが続くことになると、
水勢が弱くなってしまう(※1)。

2010年の小屋の新築までは可
搬式の消防ポンプを使って、随時キ
ャンプ場から水を送っていたのだが、
ポンプの性能の限界域での運転だつ
たせいか、頻繁に故障して悩みの種
だったこともあり、山荘の新築を機
に廃止し、雨水で運営する方針に切
り替えた。機械の調子に一喜一憂す
るよりは、大きくなった屋根を活用
して、ひとまずどこまで雨水だけで
やれるのか試みたかったのだ。

当初こそ少々甘く見ており、水の
使用ペースや貯水量に無理があつて
水が不足しては急場しのぎにスタッ
フ総動員でキャンプ場から歩荷をし
たり、登山者にボランティアを募る
などということもあつたが、近年は
ようやくこなれてきたというところ
だ。もともと、長い歴史をずっと雨
水で切り盛りして来た稜線の山小屋
などは少なくとも30トン以上の貯水
槽を保持しているとい
う話を聞くと、増
やしたとはいっても
16トンほどの蓄えし
かない雲ノ平山荘は
いっばしの天水小屋
になるには、まだま
だ道半ばと言うべき
だろう。

ところで、雲ノ平
には融雪期か大雨の
あとでないと地表面
に現れない沢がある。
山荘の目の前の北側
のくぼみの地下を流
れる祖母沢の源流で
ある。上述のキャン
プ場の湧き水がその
まま祖父沢の流れに
なっているのに対し
て、祖母沢は途中ま
で伏流水として流れ
ているために普段は
目につかないが、耳

水を不足しては急場しのぎにスタッ
フ総動員でキャンプ場から歩荷をし
たり、登山者にボランティアを募る
などということもあつたが、近年は
ようやくこなれてきたというところ
だ。もともと、長い歴史をずっと雨
水で切り盛りして来た稜線の山小屋
などは少なくとも30トン以上の貯水
槽を保持しているとい
う話を聞くと、増
やしたとはいっても
16トンほどの蓄えし
かない雲ノ平山荘は
いっばしの天水小屋
になるには、まだま
だ道半ばと言うべき
だろう。



profile

伊藤 二郎(いとうじろう)

1981年、東京生まれ。雲ノ平山荘経営者。幼少より黒部の源流で夏を過ごす。2002年に父・伊藤正一が経営する雲ノ平山荘の支配人になる。2010年、日本の在来工法を用いた現在の雲ノ平山荘の建設を主導し完成させた。

をすませば登山道沿いのこつこつし
た岩組みの下から水が流れる音が聞
こえてくる。
その見えない沢は、雲ノ平のスイ
ス庭園からギリシア庭園あたりにか
けて(第2話のコラムで書いたよ
うな地質の構造上)地表近くの不透
水層に沿って網目状に流れている伏

流水が、小屋の付近でより深くに潜
りつつ一筋にまとまり、それが祖母
沢の流れになる。このことを知らず
に祖母沢を遡行しようなどと思いつ
つと、大分長い距離のひどい藪漕ぎ
をしなければならず面食らうので
ある。

ともあれ、雲ノ平の核心部はその
まま祖母沢の水がめになつ
ていると僕は解釈している。
この沢が大雨や長雨で水嵩
を増して地表面に現れると、
その水量で周辺の沢の増水
状況を図る尺度にもなつて
いるし、融雪期には山荘の
水源にもなるため、僕にと
ってはもともと生活に密着
した沢ということになるの
だろう。

いずれにせよ、雲ノ平に
あつて、水はとても貴重な
ものだ。近年の激しい気候
変動によつて極端な干ばつ
や大雨も増えるなか、雲ノ
平での生活も、よりしたた
かに考え抜かなければなら
ないことも出てくるはずだ。
朝露をすべて集めて回る
か、見えない沢を引き込む
か、はたまた空に浮かぶ雲
を吸い込むか、空想は尽き
ない。

※1 このような状況下では無論「大きな水たまり」である池塘も2週間を待たずしてほとんど干上がる